

平成 年 月 日

平成17年度教育研究業績書

氏名 森田憲司

最終学歴	1979年3月京都大学大学院文学研究科東洋史学専攻博士課程単位取得満期退学
取得学位	文学修士
所属学会	東洋史研究会、東方学会、内陸アジア史学会、宋代史研究会、日本道教学会（評議員）
現在の専門分野	東洋史（中国近世社会文化史）
研究課題	石刻史料を用いての宋元社会文化史の研究

【研究上の特記事項】

平成16～18年度科学研究費基盤研究B「13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究  
元朝史料学の構築のために」研究代表者。同研究のNEWSLETTER『13、14世紀東アジア史料  
通信』の編集（今年度3回発行）。平成17年度～19年度科学研究費特定領域研究A「東ア  
ジアの海域交流と日本伝統文化の形成」A01-02「中国科挙制度からみた寧波士人社会の形  
成と展開（研究代表者早稲田大学教授近藤一成）」分担研究者。海外調査4回（北京、ソ  
ウル、いずれも短期間）

【教育上の特記事項】

奈良文化論において、キトラ文庫店主安田有氏との対談、「奈良の古書店は、今」を企画  
実現。

【社会的活動】

日本歴史学協会委員（学会選出、2003年度から）、市民講座講演1回（東大阪市）

【学内活動】（学内職歴を含む）

全学人事委員会委員長（2004、05年度）、大学評価委員長（2005年10月から）

落語研究会古都家顧問

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 中国の歴史・下 2 中国歴史研究入門	共編 共著 共	2005年4月	昭和堂	新しい視点からの中国史の概説書。愛宕元と同書の下巻(近世近現代)を共編し、元の部分(118-150p)を執筆。
		2006年1月	名古屋大学出版会	中国史の各分野ごとに、研究状況、史料について解説したもの。金・元の部分を担当。 172-189p
(学術論文)				
1 可看河南拓影目録 2 昌平訪碑記 3 『臨海墓誌集録』所収資料から見た新出土宋元墓誌の資料的特性	単 単 単	2005年5月 2005年9月 2006年3月	『13、14世紀東アジア史料通信』4 『13、14世紀東アジア史料通信』5 『13、14世紀東アジア史料通信』6	各種文献中で利用可能な河南地域の拓影を目録化したもの。16-24p 北京市北部の昌平区における石刻調査の報告。昌平碑林所収の元朝石刻2つを中心に取り上げている。10-14p 『臨海出土墓誌集録』所収資料を材料として、新出土宋元墓誌の史料としての特性を論じた。12-19p
(学会発表)				
1 元朝史研究と史料状況 下部構造は上部構造を規定する? 2 史料としての出土墓誌 浙江省臨海県の場合	単 単	2005年12月 2006年3月	第28回立命館史学会大会 第6回遼金西夏史研究会	史料へのアプローチをめぐる状況が、歴史学のあり方を規定すること、現在の資料環境が、元朝史研究の盛況をもたらしていることを論じた。 浙江省臨海県出土の墓誌を主な材料に、新出土墓誌の史料的特性と、この地域の官僚家系について論じた。
(その他)				
雑誌連載 「中国を読む、見る、集める」  1 悼 旭堂南陵 2 近着石刻関係書所収元代石刻リスト3 3 どうぞこの継続的努力を - 2回の見学からー 4 多様性が生み出すものとは (戦後60年目の上方芸能 - 14ジャンルの現状)	単 単 単 単 単	1993年3月から連載(月1回) 2005年9月19日 2005年9月 2005年10月 2005年12月	北京トコトコ 毎日新聞朝刊 『13、14世紀東アジア史料通信』5 『館報 池田文庫』27 『上方芸能』158	北京在住日本人対象の月刊日本語フリーペーパーに、北京を中心とした歴史文化事象を、モノやコトバを手がかりに紹介。本年度執筆は、125回から135回(細目は略)。 上方講談の三代目旭堂南陵師の追悼記事。 日本に近着の中国書籍所収の元代石刻の目録と解説。 博物館学見学実習でお世話になった池田文庫からの依頼で、同館の資料収集管理の現況についての卑見を述べた。 現在大きな転機にある上方講談界について、その現状と、多様化こそが今後の展開への可能性であること、今がその時

次と課題・講義)

時期じめつじはしいこと、などを述べた。